

遠藤周作学会 会報

第 19 号

2024 年 10 月 21 日

発行 遠藤周作学会

代表 山根道公

二〇二四年度遠藤周作学会・全国大会
総会報告
事務局より

◇第十八回二〇二四年度遠藤周作学会・全国大会開催

第十八回二〇二四年度遠藤周作学会・全国大会は、二〇二四年九月二十一日（土）に、県立神奈川近代文学館の共催で、横浜市の文学館にて開催された。

十三時に県立神奈川近代文学館館長である荻野アンナ氏による開会の辞が述べられた。まず、以下のプログラムの通り、三本の研究発表が行われた後、シンポジウムには、國學院大學短期大学非常勤講師の太原正裕氏、関東学院大学キリスト教と文化研究所客員研究員の神谷光信氏、金沢大学の飯島洋氏が登壇し、最後に総会が行われた。大会進行役は長崎純心大学の池田静香氏、国際日本文化研究センターの増田斎が担当した。

プログラム

【研究発表】

① 日本におけるカトリック作家遠藤周作

—「宗教的なもの」としての文学—

東京大学大学院博士課程 田口 哲郎
司会 日本ペンクラブ 今井 真理

② 『沈黙』における長崎言葉の由来

—『沈黙』を解剖する—

長崎大学名誉教授 増崎 英明
司会 星美学園短期大学 武田 秀美

③ 作家と文体

—遠藤周作の場合—

南山大学 金 承哲
司会 山梨英和大学名誉教授 川島 秀一

【シンポジウム】

小説家、遠藤周作の誕生―フランス留学から文壇での地位の確立まで（一九五〇年代、二七歳〜三四歳）

① フランソワーズ・パストル先生の影を追って

國學院大學短期大学非常勤講師 太原 正裕

② 遠藤周作と村松剛

―同人誌『批評』と日本文化会議を中心に―

関東学院大学 神谷 光信

③ 『海と毒薬』における戦争の記憶と傷痕

金沢大学 飯島 洋

コーディネーター・司会 南山大学非常勤講師

北田 雄一

遠藤周作学会代表の山根道公氏の閉会の辞が述べられた。そして、学会総会をもって、全国大会の日程を終了した。その後は、ポートヒル横浜にて懇親会が設けられた。立食形式での懇親会は、二〇一九年度以来であり、発表者を囲んで互いに懇親を深めた。

【総会】

先行して、役員会は九月十四日（土）二〇時からオ

ンラインにて行われた。総会の議長は、事務局長代行として笛木美佳副代表が担当し、報告・計画の説明を行った。まず、二〇二三年度事業報告がなされた。内容は次のとおり。

◆ 第十七回二〇二三年度遠藤周作学会・全国大会を昭和女子大学にて開催。併せてZoomミーティングを用いたオンライン配信も実施。対面では三十一名（うち会員外五名）、オンラインでは一〇名の参加があった。

◆ 機関誌『遠藤周作研究』第十七号発行。第十七号は五篇の論稿、三篇の書評、佐藤まどか氏による研究展望を収録。会員数は、二〇二四年九月時点で九十八名。

◆ 笛木美佳副代表（事務局長代行）により二〇二三年度の会計報告がなされ、太原正裕会計監査による説明が行われ、承認された。

続いて、二〇二四年度事業計画が示された。内容は次の通り。

◆ オンライン国際学術交流会を、二〇二四年九月二十九日（土）一〇時半から十二時まで、オンライン上にて、特別顧問ヴァン・

ゲッセル氏と山根道公代表との対談形式にて開催。本企画は、今後も継続して行う。

次年度は、中国・韓国などアジアの遠藤文学研究者との意見交換を予定。

◆ 機関誌『遠藤周作研究』次号（第十八号）は今回の発表者の原稿を掲載予定。

◆ 二〇二五年度の大会は、京都外国語大学にて開催予定。次年度のシンポジウムは、一九五〇年代後半から一九六〇年前半を対象とし、人々の苦しみや悲しみに寄り添う同伴者の追求について等をテーマとし、企画予定。なお、大会開催の日程については、昨今の大学事情、台風の襲来状況を鑑みて、時期の見直しを役員会で検討中。

◆ 事務局の負担を軽減させるために、事務局長の仕事から会計を分離独立させ、新たに会計係を設ける方向になった。

◆ 連携担当役員今井真理氏より、二〇二四年九月二十八日（土）に慶應義塾大学にて行われる「二〇二四周年忌」、二〇二五年度遠藤周作文学館の展示に関する案内がなされた。

◇ 事務局より

▼第十八回遠藤周作学会・全国大会は、対面実施で行われました。通信環境の関係上、オンライン配信を実施することができませんでした。会場には会員外の参加者も多く集い、賑やかな会となりました。丘の上から横浜が一望できる風光明媚な県立神奈川近代文学館にて、フランス留学期に関するシンポジウムを開催できたことに大きな喜びを感じます。県立神奈川近代文学館の方々をはじめ、大会運営に尽力いただきました全国大会運営委員の笛木美佳氏、香川雅子氏、そしてお手伝いくださった皆様に、改めて御礼申し上げます。

▼今回の大会の研究発表は、三名の発表者によって行われました。『カトリック作家の問題』、『沈黙』、そして遠藤文学全体の文体論など、三者とも、作家論的な観点から発表していただきました。充実した内容が、機関誌にまとめられますことを楽しみにしています。

また、遠藤周作の生涯を段階的に捉えるために企画されたシンポジウムは、第二回目の実施となりました。今回は一九五〇年代を中心とし、遠藤周作が小説家として台頭していく変遷について検討を行いました。北田雄一氏が遠藤の年譜について解説を加えてくださった後、太

原正裕氏が、遠藤と親交のあったフランソワーズ・パストルの来歴や功績などをご紹介くださいました。次に、神谷光信氏は、批評家の村松剛との交友を手掛かりに、遠藤の保守派知識人としての側面を明らかにされました。そして、飯島洋氏は『海と毒薬』を主な分析対象とし、戦争体験によるトラウマがどのように表象されているのか、検討がなされました。活発な質疑応答が展開され、大変実りのある有意義な時間となりました。

▼遠藤周作命日の九月二十九日にオンライン国際学術交流会が実施され、対面の大会に参加できなかった海外の会員をはじめ二十名近い会員が参加しました。ヴァン・ゲッセル氏から、遠藤作品の翻訳をめぐる諸問題、英語圏の研究動向など、多岐にわたった話題をご提供いただき、大変充実した対談の場となりました。

▼機関誌『遠藤周作研究』第十八号の投稿論文を募集します。投稿申し込みは、十二月末までに事務局へお願いいたします。機関誌の最後にある投稿規定をご覧のうえ、会員の方々の意欲的な投稿が多く寄せられることをお待ちしております。

▼次回の研究発表の申込みの締め切りは、全国大会開催日程に合わせ、決まり次第お知らせします。

▼次回の大会は、京都外国語大学にて行われます。第三回目となりますシンポジウムは、一九五〇年代後半から一九六〇年前半を対象とし、人々の苦しみや悲しみに寄り添う同伴者の追求をテーマにして、企画を行う予定です。多くの学会員が集い、充実した研究発表がなされ、盛会となりますことを期待します。

▼機関誌の「遠藤周作参考文献目録及び研究展望」は、引き続き、佐藤まどか氏が担当されます。遠藤周作に関する会員の方々の論文はもちろん、入手できた参考文献についての情報を、佐藤氏に直接お知らせください(E-mail: phantasieOderkat3madoka@gmail.com)。また、これまでの参考文献目録について遺漏のある場合も、ご連絡をお願いします。

(文責 会報担当 増田斎)

遠藤周作学会 事務局

〒807-8586

福岡県北九州市八幡西区自由ヶ丘1-1

九州女子大学 古浦修子研究室内

TEL: 093(693)3348

E-mail: soymilk@titan.ocn.ne.jp